

## ナンテン

牧 幸 男

晩秋から色づき始めたナンテンの葉や果実は、年末が近づくと一段とその色が冴えてくる。冬の季節になっても果実が残っているのは、冬鳥には貴重な餌となるからで、我が家の庭に、友人から入手したナンテン株がある。しかし、鳥によって運ばれたのだろう、何箇所かに増えてしまった。果実には、そのまま種を播種しても発芽しないナンテンやキハダハ等がある。これは果肉に発芽抑制物質が含まれているため、自身の成長を期待するためである。この果実を小鳥が食べて遠くに運ばれ体内で果肉が消化され、発芽抑制物質がなくなると、種子は糞とともに地上に落ちて発芽する。



ナンテンの紅葉

南天は、メギ科ナンテン属の常緑低木で、1属1種の植物である。中国原産で、日本には江戸期以前に伝わった説が一般的で、鎌倉時代にはすでに庭木にしていたようである。本件については藤原定家(1162~1241)の『名月記』(1230)の記述以降、屋敷内に南天を植えたり、垣根に利用するようになったのは鎌倉時代、生け花の花材には使うようになったのは室町時代からとされている。

南天はわが国では中部以南の暖地の山林に自生するが、通常は装飾植物として庭に植えることが多い。幹の外面は暗色をしているが、材は黄色である。通常高さは2m内外だが、稀に5mを越すものもあると言う。6月頃茎の先端に多数の小さな白色の花が咲き、秋から冬にかけて種子が二つ入った球形の赤い液果を結ぶ。南天を薬用以外に鑑賞するのは日本と中国に限られている。特に、園芸用に品種改良を進めたのは日本で、江戸時代が最も盛んで、水野忠暁(1767~1834)著『草木錦葉集』(1826)には50種、増田繁亨(生没不明)編纂『草木奇品家雅見』(1827)には27種も収載されている。主な品種は葉の形から、円形の丸葉南天、笹の葉に似る笹葉南天、葉が狭い糸南天、葉片がなく葉柄のみの棒南天等がある。また、果実の色から白南天(白実南天)、赤南天、白南天(白実南天)、黄色の潤実南天などもある。その他ハボタンと寄席植えし床飾りに使うオタフクナンテン、ミニ盆栽向きのキンシナンテンなどの種類も知られている。

このように生活の中に取り入れられた南天であるが、吉凶に関係あるためか詩歌に登場するのは、明治になってからが多い。

床に活けし 南天赤し 来む年を のぞみ迎ふる われならなくに 桜井ツネヨ

実南天 二段に垂れて 真赤かな

富安風生

植物名の由来は、中国語の音読み。漢名は冬に目立つ赤い果実から灯火を連想して南天燭、また葉や幹の姿が竹に似ることから南天竹(南天竺)と名付けられた。学名は *Nandina domestica* で、属名は日本名の転化、種小名は家庭の意味から、庭園の植物となる。

我が国では、南天は読みを「難轉」[難を転じる]の語呂合わせもあり縁起の良い木とされたので、身近な植物となった。

江戸期の寺島両安編纂『和漢三才図会』(1712)には「南天を庭に植えれば火災を避けられる」とあり、赤い実が逆に「火災除け」として玄関前に庭木として、縁起木として鬼門または裏鬼門に、あるいは便所や手水鉢のそばに「南天手水」と植え、不浄を清めたり、あるいは家相を気にする人は鬼門に厄払いの目的で植えることが多い。特に、実の赤い色には縁起が良く厄除けの力があると信じられ、江戸後期



ナンテンの花

から慶事に用いるようになったと言う。また、ナンテンは災難よけのお守りとして、小児の着物に縫いつける風習や、食あたりを転ずる意味で、お強を配る時お祝い事には「葉を表」に、仏事には「葉を裏」に置いている。この理由は、ナンテンの葉が熱と水分でシアン化水素がわずかに発生して殺菌効果が生じると考えられている。更に、南天の箸を使うと無病息災、歯茎をしめる、床にナンテンを敷いて妊婦の安産を祈願したり、武士が出陣前に床に差し戦の勝利を祈願するためにも使われていた。

薬用として南天は『神農本草経』(250~280頃編纂)や『名医別録』(1~3世紀齊編纂)には記載がない。始めて登場するのは『開宝本草』(973~974)で「南燭」の名称で、葉は世(下痢)、筋を強くし、白髪を黒く変え老化を去る、実は筋骨を強くし、気力を増し等に記述があるが、恐らく本来の南天の記述ではないだろう。その後、蘇頌(1020~1101)著の『図経本草』(1062)でも「冬紅子生じ穂を作る、人家の多くは庭の階段付近に植え、俗に南天燭という。」の記述で効能の記述はない。その後発行された趙学敏(1719~1805)が編纂した『本草綱目拾遺』(1765)には南天竹の植物名が登場し、葉は哆涙(目にやにと涙が出る)、赤痢、児の疳を去る等、実は八角蝨(ケジラミ)の治療に水銀と、小兒天哮(百日咳)等の効能示されている。これらの記述を見ると咳止めの関する記述は趙学敏(1719~1805)選の『本草綱目拾遺』(1765)のみである。

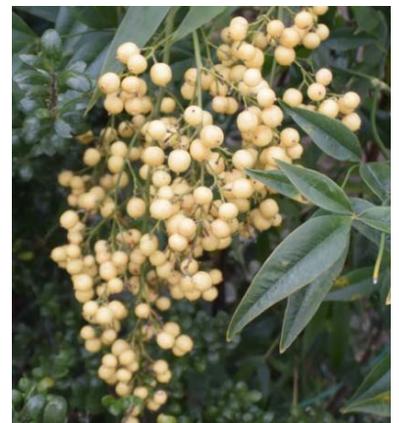
『本草綱目拾遺』の小兒天哮(百日咳)の記述は、時代も江戸末期、我が国の民間療法における南天の利用のすぐれているのを示している。特に、我が国では民間療法に南天使用は盛んで、小山田与清(1783~1847)著『松屋筆記』(1818~1845)には「クツメキと言う病にあえば必ず百日ばかりの咳に苦しむ。いかなる薬も験なきなり。これには南天竺の実に砂糖を加えて煎服せしむれば速やかに効あり」、衣関順菴(貫)(?~1816)著の『諸国古伝秘方』(1817)には咳嗽二、南天ノ実ヲカゲボシ、黒ヤキ、白砂糖ニテネリ、サユニテ用フや星齊英寿(生没不明)『諸病薬記』(1850)等に、鎮咳去痰に有効な記述が多い。また、葉の利用されており衣関順菴(貫)著『諸国古伝秘方』(1817)には「擦傷二、南天の葉を生ノママ、スヂヲトリ粉ニシツクベシ」の記述もある。

今日では、南天は日本薬局方外生薬規格2022に生薬名南天実、天竺子で記載されているが、ナンテンまたはシロミナンテンが記載されているのみである。使用に当たって乾燥した実を煎服すると咳止めに効果がある。学実的には成分的には赤実も白実も違いはないとされているが、なぜか昔から特に白実の方が薬効に優れているとする伝説が伝えられている。

また、中国の『中薬大辞典』(第2版2021版)には南天竹の生薬名で、茎と枝(南天竹梗)、根(南天竹根)、果実(南天子)、葉(南天竹葉)に分類しそれぞれの効能が示されている。

材は丈夫な木で、特に、杖は軽く丈夫なため老人向きに、太い木で有名な利用は、金閣寺の床柱であろう。また南天の枕は「邯鄲(河北省)の枕」の名でよく知られている。甘藷の枕について中国の故事は「盧生という青年が甘藷という町で枕を借りて眠ると、次第に出世して栄耀栄華を極め80余歳で大往生を遂げた。ところが目覚めてみると50年以上も経過していたのに、眠る前に見た炊きかけの黍飯も炊き上がっていない、現実世界ではほんのわずかな時間しか流れていなかったことに気がついた。盧生は、この夢によって、出世したいとあくせくいきることの空しさを実感したのだった。人生のはかなさをたとえる故事であるが、この「甘藷の枕」も南天の材で作られていたと言われており、日本でも悪い夢を見たら床に南天を活けると悪夢が消え、枕の下に南天の葉を敷くと悪い夢を見ないと言い伝えられている。

花言葉は「赤実は幸せ、私の愛は増すばかり、福をなす、よき家庭」、「白赤実は、深すぎる愛、機知に富む、つる愛」である。



シロナンテンの果実

